

鳥取県智頭町

「森のようちえん まるたんぼう」の見学報告

龍谷大学短期大学部・教授 里山学研究センター・研究員
田岡由美子

1. はじめに

本稿は、鳥取県八頭郡智頭町において実施されている「森のようちえん まるたんぼう」を見学し、関係者へインタビューを行った内容の報告である。

「森のようちえん」とは、主に自然体験活動の総称で、とりわけ幼児（0歳～7歳くらいまで）が、森林、川や海、里山や都市公園を含めた自然の中で活動することを指す。1959年代にデンマークで一人の母親が森の中で保育をしたことが始まりとされており、その後、1990年代から2000年代にかけて北欧やドイツへと広がった。やがて日本でも、海外の「森のようちえん」活動に関する著書や実践が数多く紹介され、各地で勉強会が開かれるようになった。2004年に「第1回森のようちえん全国フォーラム」が宮城県で開催されたことをきっかけにして、さらにその運動は盛んとなり、2008年には「森のようちえん全国ネットワーク」が設立され、現在では300弱の団体が所属している。

2. なぜ、鳥取県八頭郡智頭町の「森のようちえん まるたんぼう」なのか

今回見学させていただいた鳥取県八頭郡智頭町の「森のようちえん まるたんぼう」は、2009年に無認可保育所として開設された。

ここを見学施設として選んだ理由は2点ある。1点目は、本活動が、「森のようちえん」が日本に浸透する比較的初期段階から運営され、日本における「森のようちえん」活動をリードする形で現在まで継続・発展していることである。全国に先駆けていち早く保育活動を森の中で行うに至ったきっかけや経緯、現状や課題が、ある程度蓄積、整理されているのではないかと考えた。

2点目は、行政を巻き込んだ活動展開を行なっている点である。そもそも「森のようちえん」には様々なスタイルがある。たとえば、①自分で子どもを集め、保護者から保育料を預かって幼児を森に連れていくといった自主保育や認可外保育の立場、②週末や長期休暇を利用したイベント型、③子育て中の親が数人集まって近所の森に連れていくような民間のインフォーマルな形態、④既存の幼稚園や保育園のカリキュラムに自然体験活動を取り入れ、園で畑や森を借りたり、園バスで毎週森（里山）に出かけていくスタイルである。鳥取県では2015年に、県内の恵まれた自然のフィールドという独自性を活かした保育を行なう園を「自然保育を行なう園」として認証（国ではなく県が乳幼児保育・教育施設として認めたことを意味する）し、町の事業として展開している。なぜ、智頭町では「民間レベル」ではなく、「行政」

をも巻き込んだ形態が可能になったのか。そのいきさつも知りたいと思った。

3. 見学・インタビュー報告

(1) 実施日

① 2022年11月25日（金）10:00～14:00

「森のようちえん まるたんぼう」の保育を見学、保育士の山中寿広氏にインタビューを行い、保育の目的や保育方針について伺った。

② 2022年11月26日（土）11:00～15:00

智頭町芦津みたき園にて、前町長の寺谷誠一郎氏と代表の西村早栄子氏にインタビューを行い、「智頭町 森のようちえん まるたんぼう」設立経緯を伺った。

(2) 11月25日（金）実施の見学・インタビュー内容の報告

① 見学

10:00過ぎから見学させていただいた。20名弱の子どもたちがすでに森に出かけており、3名の保育者と共に、各々落ち葉やすぎぼっくりを投げ合ったり、倒木の枝に腰かけて話をしたり、木切れを振り回したり、買い物ごっこなどの遊びをしていた。保育者からは声かけせず、子どもが自分で楽しいこと、やってみたいことを探して遊んでいる。昼食は各自取りたいときに食べるということで、子どもたちは各自リュックからお弁当を出して、おにぎり等を口にしていた。

その後、場所を少し移動するが、移動の道のり自体が、急な斜面を滑り降りたり、遠回りをしたりしながらの遊びとなり、思い思いに楽しみながら低地に移動した。背の高い枝がしなる木が2本あり、そこで木登りをしたり、木を揺らしたりして遊んでいた。また急斜面を歓声を上げて滑り降りる子どももいた。さらに木の実や動物の糞をみつけて保育士と話をしていた。落ち葉を投げ合って遊ぶ子どももいた。

一斉に何かをする活動はないが、絵本や素話は保育士の下に集まって聞いたり、ギターを持参して歌を歌うとのことであった。見学した日は絵本の時間はなかった。お天気が良く、ゆったりと時間が流れる気がした。見学のみで、子どもたちに声をかけることは禁止されていたので、遠くから見守る感覚で見学させていただいた。

② 保育士の山中寿広先生へのインタビュー

保育活動の途中で子どもたちと離れて、屋根のある場所に移動して保育士の山中氏からお話を伺った。山中氏は幼少期から智頭町の森の中で遊び、森のことを知り尽くしている方でもあった。案内の途中も「これは食べることができる、食べられない」、「これはキューイの味がする子どもたちが大好きな実だ」といったように、草木や木の実、きのこについて説明された。

「まるたんぼう」の対象児は3歳から5歳の幼児で、1学年の定員は10名。月曜日から金曜日まで天候にかかわらず森の中に出かけて保育を行なっている。

毎朝、智頭農林高等学校前の広場に集合し、そこからバスで森に入っていく。どこの森で遊ぶかは、その日子どもたちと話し合って決める。遊べる森や原っぱ、集落、野外施設のフィールドは智頭町内に14カ所あり、いずれも集落の自治体や森の地権者が管理や整備に協力している。そのためか車で森の中に入る途中で、地域の人に出会うと、山中氏は必ずスピードを緩め、車の窓を開けて「こんにちは」と挨拶されていた。必ずしも地域のすべての方々が「森のよう

ちえん」活動に賛成しているわけではないので、挨拶することで「森のようちえん」活動への周知や理解につなげるように留意していると話された。

森の中での保育終了後は、子どもたちをバスに乗せて広場に戻り、そこに来ている迎えの保護者に子どもたちを引き渡す。ほとんどの子どもたちが預かり保育対象児で、その子どもたちは再度バスで「まるたんぼうハウス」へ移動し、そこで14:00から夕方まで過ごす。

保育の目的は「たくましい体」と「しなやかな心」を育むことで、暑さ寒さやでこぼこ道など四季を通して森に入ることによって体が鍛えられ、仲間と遊び、助け合い、時にはぶつかり合いながら、自分で考え行動していけるしなやかな心が育まれると考えているとのことであった。子どもたちが主体的に自然とかわることができるよう、声かけは最小限にしているとのことであった。

見学した日は好天であったが、12月に入り寒くなるとどうするのかと質問した。それに対して、雨の日も雪の日も戸外で保育活動をしており、雪が積もるまでの風の冷たい日が一番寒く、泣く子どももいるとのことであった。しかし雪が降り積もると、雪で何かを作ったり、雪投げをしたり、斜面を滑ったりなど楽しい活動ができるので、子どもたちは歓声をあげて遊ぶ。

森の中をお散歩することを中心に遊びが展開されるとのことであったが、具体的に季節ごとの遊びについて伺った。春は虫取り、草花摘み、それを用いて製作をしたり、身に着けて遊ぶ、土おこし、泥遊び、田植え、野菜作りなどである。夏はせせらぎや川のある森を中心に歩き、川遊び、フィンガーペイント、石で囲ってダムを作ったり、お風呂屋さんごっこ、長靴をバケツ代わりにして自分の頭から水をかけて楽しんだり、野菜の収穫をして料理をする。秋は落ち葉や木の実で遊んだり、キノコ採り、稲刈り、サツマイモや野菜の収穫、焚火で料理をしたり、地域の方々に薫を編むことを教えていただいたりする機会もあるとのことであった。

「食」を大事にされていて、週に1回はご飯を炊き、みそ汁を作って食べる会を実施している。そうめん流しや釣った魚を焼いて食すことや、地元の人が捕った鹿を解体していただく機会もあったとのことであった。

安全について質問すると、点検事項を記した表を見せてくださった。どんなに注意を払っていても、切り傷等はある。しかし大きな事故はこれまでにないとのことであった。保育士はのんびりと子どもたちを見守っているようにみえるが、常に「あれは危ない」、「援助に入ろう」と注視していると話された。また、保護者も一緒に保育に参加して、森の活動について理解を深めてもらえるようにしているそうだ。たとえば、保護者の会のイベントや、『山観日』と名付けた父兄参観日のほか、年間に最低でも2回は日常の森での保育に参加することを保護者の義務にしていると話された。

(3) 11月26日(土)のインタビュー内容の報告

11時から智頭町芦津みたき園にて、前町長の寺谷誠一郎氏と代表の西村早栄子氏にインタビューを行い、「智頭町 森のようちえん まるたんぼう」設立経緯を伺う。

智頭町は、鳥取県の東南に位置し、南と東は岡山に接している。周囲は中国山地に囲まれ、町の総面積の9割以上が山林で、林業が主な産業である。前町長の寺谷誠一郎氏にとっては、衰退の一途をたどっていた智頭町の活性化が大きな課題であった。

そこへ、2006年夫婦とも林業関係の仕事に就いていた西村夫妻が智頭の森の豊かさに魅せられ、夫の実家のある智頭町に移住してきた。妻である西村早栄子氏は、デンマークで始まった

「森のようちえん」の存在を知り、子育て仲間の友人たちと智頭町に「森のようちえん」を開設したいという願いを持つようになった。時期を同じくして、地元の小規模保育園が、子どもの数の減少により合併を余儀なくされ、廃止となった。町長になり町政を担う寺谷誠一郎氏が、『町民の良いアイデアに町が予算をつけます！』という施策を打ち出した。そこで、西村氏を中心として、子育て中のPTA仲間のお母さんや若い町職員の奥さん、保育園関係者たちとの出会いや協力のもとに、2008年3月に『智頭町に森のようちえんをつくる会』が結成された。

まずは月1回の「森のおさんぽ会」が実施されるようになった。その後、順調に参加者は増え、同年12月には町の発展を期待して町民の参加を促した「智頭町100人委員会」にて「森のようちえん」設立のための予算折衝を行い、4月より保育士一人分の人件費予算申請が通り、2009年に「森のようちえん」開園の運びとなった。こうして「智頭町 森のようちえん まるたんぼう」は、子育てを担う保護者からの子どもを自然の中でのびのびと育てたい要望と、林業を主産業とする智頭町ならではの特徴を活かして町を発展させたいという行政からの思惑が合致し、開設に至った。

その後も行政とのかかわりは続き、『ふるさと雇用特別基金』、『まちづくり交付金』、『森のようちえん支援制度』（森の癒し事業費補助金の中の一つのメニューとして）などを利用しながら、県と町と園が活動経費の3分の1ずつを負担し合う制度で、活動運営費を賄っている。さらに、『職場体験事業費補助金』、『鳥取力創造補助金』、『協働提案・連携推進事業』などを活用し、冒頭で述べた「森のようちえん認証制度」を、官民学で全国に先駆け取り組むこととなった。

このように、「森のようちえん」が智頭町や鳥取県といった地元自治体と連携して、さまざまな補助金や交付金を活用できていることは大きな特徴と言える。また、各種メディアにも取り上げられ周知された「森のようちえん」は入園希望者も増え、2013年4月には2園目の「すぎぼっくり」の立ち上げに至った。智頭町の「森のようちえん」で子どもを育てたいと考え、智頭町への移住者も増えている。これに伴い、保護者にとって預けやすい園として午後からの託児サービスも実施するようになった。ともすれば教育熱心な保護者による午前中保育のみの多い「森のようちえん」であるが、智頭町では共働きでも利用しやすい、子育て世代の生活に即した「森のようちえん」となっているのも特徴である。

現在、スタッフは事務局長、バスドライバーを含めて10名で、うち4名が保育士有資格者である。子育て世代のみならず、仕事をリタイアした知識や経験豊富な年配者も含まれており、幅広い年齢の構成となっている。

4. 明らかになったこと

(1) 行政・住民・教育の協力

「森のようちえん」活動において、既存の保育施設のカリキュラムの中に森での活動が含まれたり、個人の保育グループによる運営が多い中、「智頭町 森のようちえん まるたんぼう」が、県や町からの認証を得て公的な乳幼児保育・教育施設として運営されているのは非常に珍しい例で、特筆すべき点である。その背景には鳥取県や智頭町が抱える高齢化や過疎化の問題や森林が90%近くを占める主産業の衰退にどう対応していくかという行政側の課題解決への模索がある。今回の見学とインタビューから明らかのように、「智頭町 森のようちえん まるたんぼう」は、森の中でのびのびと子どもを育てたいという子育て世代の願いと、県や町の活

性化を模索する行政側の思惑が合致して誕生・継続している。しかも、そこには住民、行政側に思いを前へ強く推し進めるリーダーシップを持った人物や、両者の思いに賛同して森を提供する地権者、保育の専門家も加わって、大きなうねりとして動いていることがわかった。

(2) 自然に精通した保育者の存在

実際に森の中での活動を安全にかつダイナミックに展開していくには、やはり森に精通した保育者の存在は不可欠だと感じた。子どもの主体性を重視して積極的に声はかけないが、何が安全・安心で、何が危険なのかを知っておく必要がある。それによって遊びの面白さも深まる。その意味で保育者自身が自然に精通していることは重要だと思った。

(3) 子育て世代以外の地域住民を巻き込む

子どもの自然体験を望む若い世代だけが盛り上がるのではなく、仕事をリタイアされた中高年の方、お年寄りの方を巻き込んで楽しむことが、森のようちえんを継続・発展させるのに不可欠だと感じた。「まるたんぼう」においても、森の管理や整備、稲作、畑づくり、わら細工、藍染め、木工細工、お祭りなど、様々な技術、知恵、伝統文化を持った多世代の力を借りて保育を行っていた。それは、その地域の文化を伝え、継承することでもある。保育者の山中氏が、会う人ごとにわざわざ車のスピードを緩めて挨拶をしながら山に入っていく姿は印象的だった。山中氏は、智頭町の森のようちえん活動はまだまだ小さな輪であるが、地域の多くの人々に理解してもらうための努力を日常の中で行っていかねばならないと語る。「森のようちえん」は、子どもの保育・教育のみならず、地域の世代を超えた人とのつながりを育むことができると思った。



三人で仲良くおはなし



大きな木の上で、下で



みんなそろって移動

[illegible]

安全用チェックリスト